

2-2. 事前避難

1. 避難指示と事前避難

01. 臨時火山情報が出されたことにより、伊達市・虻田町・壮瞥町の 3 市町の住民約 400 人が自主避難をした。

虻田町、壮瞥町、伊達市にまたがる有珠山(732 メートル)で火山性地震が多発、室蘭地方気象台は 28 日、臨時火山情報を発表して嚴重注意を呼び掛けている。同日午前 10 時 48 分にも伊達市で震度 1 の有感地震を観測するなど、火山性地震の回数は 27 日午前 8 時から 24 時間で 705 回に達した。気象庁は震度計設置など観測態勢を強化する一方、「火山性地震が多発しており、噴火の可能性が高い」と注意を促している。地元の壮瞥町などは噴火対策本部を設置して警戒にあたり、有珠地区で独居老人を避難をさせるなど住民に注意を喚起している。火山性地震の多発は、23 年前の昭和 52 年 8 月に噴火して以来初めて。

[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.32]

有珠山の火山性地震の多発で、胆振西部の市町村は 28 日、情報収集を始め、噴火に備えて住民の避難対応に追われた。壮瞥町では昭和新山地区などで自主避難を呼び掛け、伊達市ではお年寄りら約 90 人が避難、虻田町でも万一に備えて避難所態勢を整え、26 人が避難した。今のところ避難などで混乱はなく、整然とした行動が目立っている。各自治体では火山情報への注意などを住民に呼び掛けている。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.34]

胆振管内虻田町の有珠山(732 メートル)は 28 日午後になっても活発な火山性地震が続いた。地表に近いところで起き、噴火の可能性を示すとされる「低周波地震」も観測された。このため、同町や同管内壮瞥町、伊達市の周辺 3 市町で、29 日午前 0 時まで、計 173 人が公民館などに自主避難したほか、同市と同管内虻田町の老人福祉施設 4 カ所の入所者 249 人がほかの施設に移った。[『毎日新聞』(2000/3/29 北海道朝刊)]

02. 伊達市・虻田町・壮瞥町が住民に対して避難勧告(後に避難指示に変更)を発令し、9000 人以上の住民が避難をした。

今回の有珠山噴火災害にあたっては、3 月 31 日の噴火前に火山性地震などの噴火の予兆現象が観測されることに伴い、北海道大学有珠山火山観測センターの岡田教授や気象台、関係市町との協議に基づき、噴火前の 3 月 29 日に避難指示が各市町長から出された。

避難指示区域は、壮瞥町の洞爺湖温泉地区・壮瞥温泉地区・昭和新山地区、伊達市の長和地区・有珠地区、虻田町の洞爺湖温泉町全域・泉地区・入江(国道 230 号より有珠側町界まで)に、さらには、30 日には虻田町月浦、高砂地区及び入江地区の全域に、31 日には虻田町の清水・花和地区を除く全域が避難指示区域として設定された。[『2000 年有珠山噴火災害・復興記録』北海道(2003/3),p.79]

火山活動が活発化している有珠山(732 メートル)は 29 日、火山性地震が急速に増加する

など一段と噴火の危険性が強まり、北海道防災会議の地震火山対策部会専門委員会は同日、「早ければ一両日中にも噴火する可能性が強い」との見解を示した。地元の胆振管内壮瞥、虻田、伊達の3市町は同日午後6時半、危険区域内の住民に避難指示を出した。自主避難地区を含めた対象住民は3市町で計4435世帯1万48人となり、3市町の人口約5万人の2割を占める。

避難指示の対象は、壮瞥町が壮瞥温泉、洞爺湖温泉、昭和新山の3地区198世帯408人、伊達市が有珠、長和の2地区2048世帯4924人、虻田町が洞爺湖温泉、泉、入江の3地区1891世帯3896人。いずれも火砕流などの発生で被害が懸念される山ろく区域。このほか、壮瞥町の滝之町地区123世帯272人と伊達市関内地区175世帯548人に自主避難を促している。

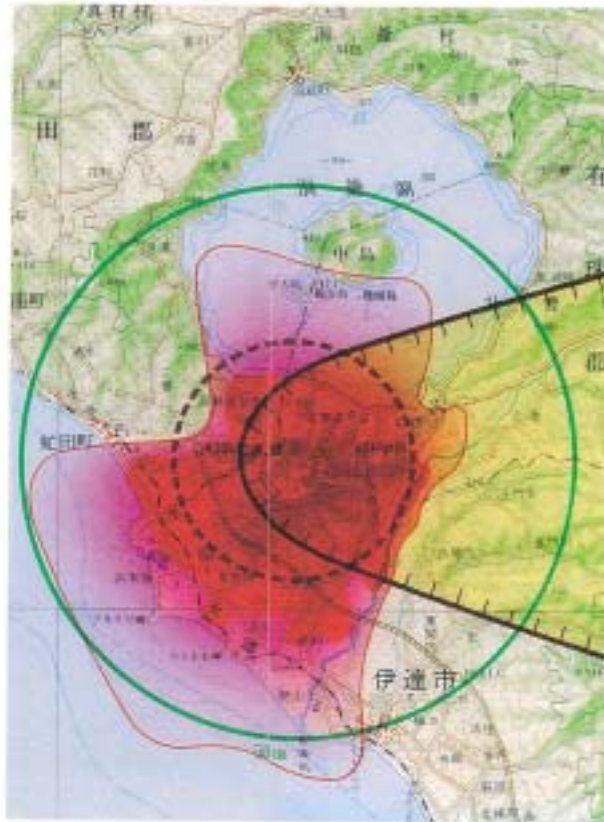
3市町は午後1～3時に相次いで避難勧告を出したが、同6時半以降、さらに対象区域を拡大し、拘束力の強い「指示」へ格上げした。住民たちは指定された公民館や学校、体育館などの公共施設に避難した。

また、虻田町洞爺湖温泉町の病院では、入院していた重症患者ら152人が陸上自衛隊第7師団(司令部・千歳市)の協力を得て伊達市や同管内洞爺村などの病院に移った。虻田町入江と伊達市有珠地区の四つの老人ホームの入所者計248人も、区域外の施設へ避難した。[『毎日新聞』(2000/3/30 北海道朝刊)]

虻田、壮瞥、伊達の各市町対策本部は29日午後、災害対策基本法に基づく避難勧告を、3市町合わせて3651世帯、8014人に出した。同日午後6時半には、伊達市と虻田、壮瞥町の対策本部が、避難勧告からより拘束力の強い避難指示に変えた。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.37]

03. 事前避難の避難区域は、火山防災マップの危険区域をもとに設定された。

壮瞥町有珠火山災害対策本部(本部長・山中漠壮瞥町長)は28日夕、有珠山火山防災マップ(ハザードマップ)に基づき、警戒区域を設定し、昭和新山や壮瞥温泉、洞爺湖温泉3地区の住民に自主避難を呼び掛けた。また、低周波地震が発生した時点で、滝之町の一部住民にも避難勧告する予定だ。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.34]



【拡大図】
1995 有珠火山噴火防災会議協議会（伊達市・虻田町・壮瞥町・豊浦町・洞爺村）

図 1995年10月ハザードマップ(提供：有珠火山防災会議協議会)

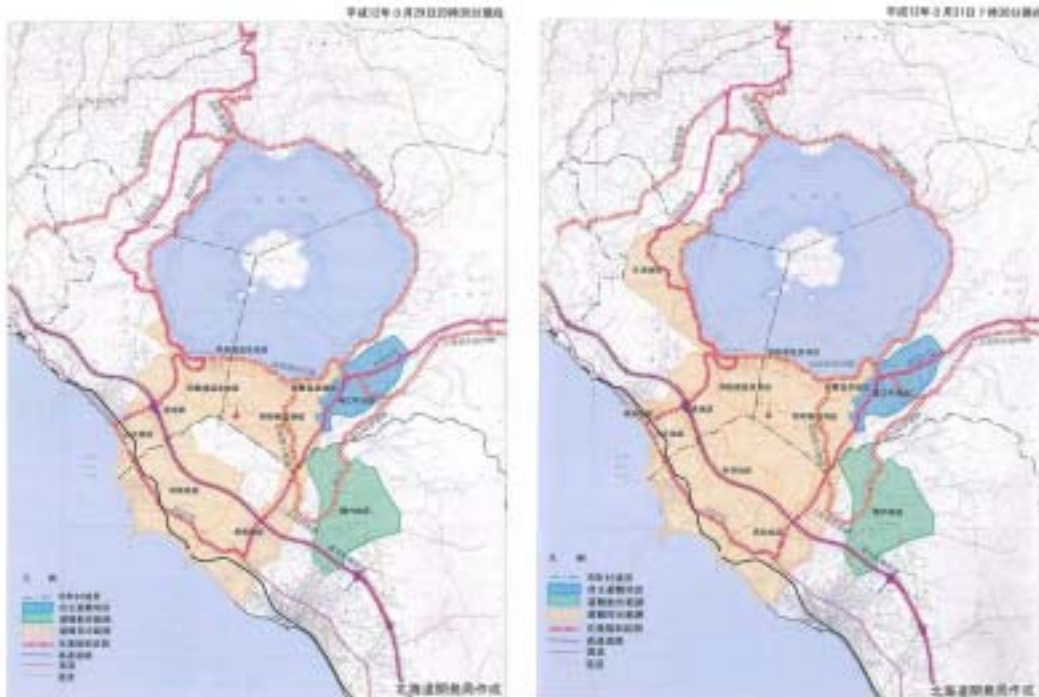


図 避難指示区域図(H12/3/29,3/31)(提供：北海道開発局)

04. 避難活動は、多少の混乱はあったものの、スムーズに行われた。

ハザードマップ・地域啓発の「資産」があったおかげで、3月28日の地震多発、「一両日以内に噴火」の予知通りに同31日午後の「噴火」と進んで、大手マスコミが「混乱と不安の避難」と書きながらも、実際は「予期したスムーズな避難」につながった。前回噴火では予知不能で「大混乱・自衛隊救出」というギリギリの避難を経験しているだけに、伊達市、壮瞥町、虻田・洞爺湖温泉街も整然たる避難だった。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.29]

有珠山は有史以来火山学の観点から見れば、頻繁に噴火を繰り返して来た。その観測や経験の蓄積が噴火の予知を可能にし、事前の避難もスムーズに行われた結果、一人の犠牲者も出さなかったことは火山噴火史上でも快挙と評せられる。[高倉嗣昌「有珠山噴火災害に伴う避難住民受け入れ状況に関する調査報告」『開発論集 第72号』北海学園大学開発研究所(2003/6),p.1]

05. ハザードマップの見直しに伴い、避難指示区域が拡大された。

国の15省庁と道でつくる有珠山現地連絡調整会議(議長・田村政志国土庁防災審議官、真田俊一道副知事)が30日午前、伊達市役所で開かれ、北大有珠火山観測所の岡田弘教授の提案を受け、現在のハザードマップの見直しに早急に入ることが確認された。

同教授は「強い地震が継続しているのは過去7回の噴火でなかったケース。現ハザードマップは山頂噴火を想定しており、山体北西側の噴火を想定するハザードマップ早急に作る必要がある」と提起、中継テレビの堀道知事も「ハザードマップ見直しを早急につめてほしい」と要請した。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.41] 有珠山噴火の危険区域を予想した「有珠山ハザードマップ」の一部変更の必要性が、30日に開かれた有珠山現地連絡調整会議で指摘され、虻田町は火砕流に襲われる危険性が高い地区を、泉地区の一部と月浦地区にまで拡大した。

現在のハザードマップは、山頂噴火を予想して作成された。北大大学院理学研究科の岡田弘教授によると、地震の震源が有珠山の北西部に集中しており、洞爺湖温泉側に近い部分で噴火した場合、火砕流本体は同温泉西側の泉地区にも及ぶ恐れがあるほか、熱風もさらに西側の月浦地区に達する可能性があるとした。

このためハザードマップも最悪のケースを想定したものに変更。火砕流本体に襲われる恐れがある区域を泉地区にまで拡大。熱風に襲われる恐れがある区域に月浦地区も含めた。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.42]

平成12年3月30日の午前に開催された、有珠山現地連絡調整会議で北海道大学岡田教授が「現在の地図は山頂噴火を想定したもので手直しの必要がある」と指摘し、同会議が10時50分、有珠山北西部での噴火に備えた火砕流や火災サージに襲われる危険区域として虻田町月浦と泉地区の一部を追加、拡大したハザードマップの見直しを行った。

また、3月31日、噴火直後に西山火口の影響を考慮し、西側に危険区域を拡大した。[『平成12年(2000年)有珠山噴火1年の軌跡』北海道建設部(2001/7),p.21]

30日はハザードマップの見直しに伴う危険区域の変更により、新たに避難命令が発令された虻田町月浦地区・入江地区・高砂地区の住民約1,300人の避難誘導を行った。[『2000年有珠山噴火・その記録と教訓』北海道虻田町(2002/12),p.358]

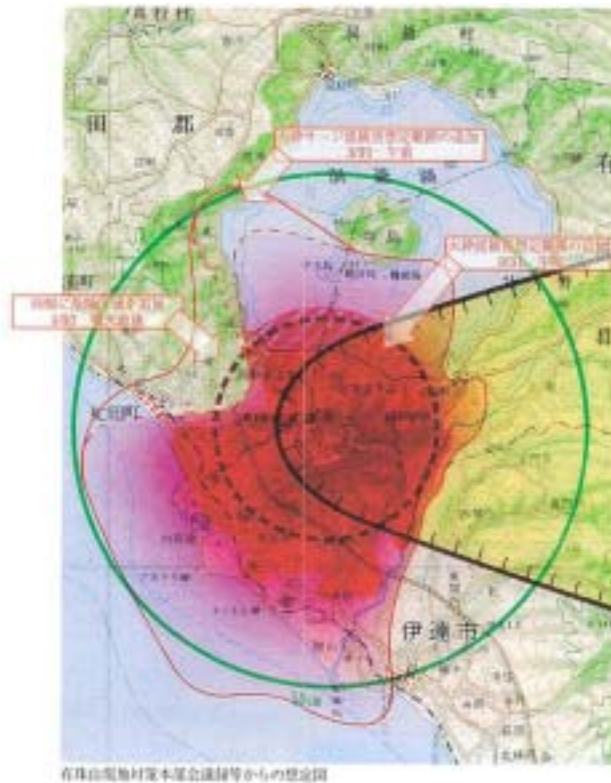


図 2000年緊急見直しハザードマップ(提供：有珠火山防災会議協議会)

2. 避難活動支援

01. 地元自治体は、地域住民の避難支援を行った。

伊達、虻田、壮瞥ではそれぞれ複数の避難所を開設し、各地区の高齢者世帯を中心に自主避難を受け入れている。さらに、特別養護老人ホームなど4社会福祉施設のおよそ200人が安全な伊達市内や豊浦町内の施設へ避難し一夜を過ごした。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.33]

伊達市災害対策本部は午前10時40分、有珠山に近い、伊達市有珠と長和の両地区の独居老人ら合わせて182人に対し、自主避難を要請した。お年寄りらは、一時集合場所となった各地区のコミュニティセンターや福祉センターに集合した後、午後5時から、避難場所に指定された市街地の市武道館と市保健センターにバスなどで移動した。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.34]

虻田町災害対策本部(本部長・長崎良夫町長)は28日、洞爺湖畔周辺などに3カ所の避難所を設置、毛布などを運び込み、町民の受け入れ態勢を整えた。

同本部は洞爺湖温泉町のとうや湖コミュニティセンター、高砂町のあぶたコミュニティセンター、月浦研修セミナー(旧月浦小中学校)の3カ所を現段階での避難所とし、それぞれ毛布20枚を運び入れた。月浦研修セミナーは独居老人用として希望者を受け入れ、とうや湖コミュニティセンターと月浦研修セミナーの2カ所で合わせて11世帯26人が自主的に避難した。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.34]

壮瞥町では、この日午前9時から洞爺湖温泉築と昭和新山地区で火山情報の収集、広報活動に追われた。町では「噴火は一両日中に発生する」との想定で、既に自主避難を呼びかけるとともに、町職員は24時間態勢で推移を見守っている。

自主避難に関しては、28日午後3時から各戸に文書を配布し、避難場所を町民に知らせるとともに、噴火の可能性が高まっている状況などを知らせた。

[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.33]

02. 周辺自治体が、避難住民の受け入れ態勢を整え始めた。

室蘭市は、有珠山火山活動連絡本部(本部長・村上助役)を29日午前9時、設置した。また、同日、伊達市からの要請を受けて避難所開設の準備に入った。当面は港北町の国道37号沿いにある「サンライフ室蘭」と、隣接する「本輪西会館」の2カ所で対応する。2カ所合わせて約250人の受け入れが可能。

避難場所は当初、白鳥台の本室蘭、白鳥台両小、本室蘭中を予定していたが、入学式にぶつかるとして変更した。避難者が増えた場合は、白鳥台会館、日石体育館、市体育館などを避難所とする予定。

[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.37]

有珠山に噴火の恐れが出てきたことで、登別市は29日午後、上野晃市長を議長とする災害対策連絡会議を設置した。また、伊達市からの要請に基づき毛布300枚を送付。避難所開設の準備も進めた。

(中略)支援体制では、この日毛布300枚を送ったほか、要請があった場合に備えるため老人福祉センター、登別市総合福祉センター・しんた21、鷲別公民館、富士会館の4カ所を避難所とすることを確認した。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.37]



図 2000 年有珠山噴火避難所設置位置(提供：北海道開発局)

03. 陸上自衛隊第七師団(千歳)により虻田町・壮瞥町・洞爺村内の入院患者を安全な同管内洞爺村の病院に搬送した。

3月29日午後3時20分、胆振支庁から洞爺協会病院入院患者輸送の要請があり、第71戦車連隊は午後5時55分所在駐屯地を出発、午後7時23分現地に到着して患者2名を洞爺湖温泉病院に搬送した。[『2000年有珠山噴火・その記録と教訓』北海道虻田町(2002/12),p.348]

虻田町洞爺湖温泉町の病院では、入院していた重症患者ら152人が陸上自衛隊第7師団(司令部・千歳市)の協力を得て伊達市や洞爺村などの病院に移った。虻田町入江と伊達市有珠地区の四つの老人ホームの入所者計248人も区域外の施設へ避難した。[『毎日新聞』(2000/3/30 北海道朝刊)]

04. 日本赤十字社北海道支部が、災害対策本部を設置し、救護活動を本格化した。

日赤北海道支部は31日の有珠山噴火で災害対策本部を設置、救護活動を本格化させた。

これまでに道内の各日赤病院から応援を得て、医師や看護婦らが避難所へ出向き、被災者の健康状態をチェックしている。さらに、毛布や日用品を伊達市、虻田町、壮瞥町などに送ったほか、近日中にはお見舞いセットを含めて避難所へ配送する。伊達赤十字病院内に「心のケア相談窓口」を開設する予定だ。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』

室蘭民報社(2000/12),p.56]

3月30日、日赤は伊達赤十字病院に現地災害対策本部を設置するとともに、同院および函館・栗山の各日赤病院から救護班を派遣して避難所での救護を開始した。[槇島敏治「日本赤十字社の有珠山噴火避難者に対する心理的支援プログラム」『日本集団災害医学会誌』日本集団災害医学会(2001/8),p.31]